「ルース像」

1932年、水彩、紙
30・4センチ×23・5センチ

野田英夫（1908～39年）

多くの日本人画家がパリを目指した1900～30年代、米国に渡り美術を学んだ画家の一人、野田英夫は米国で日系移民の子として生まれました。

3歳から日本で育ち、18歳で再び渡米。大都会に生きる庶民の生活に目を向けたアメリカン・シーンの画家たちとともに活動を始め、20歳代半ばには画家として認められるようになります。ベン・シャーンとともに当時の世界的壁画家ディエゴ・リベラの助手として壁画制作にも携わり、米国美術界で注目されました。

1932年、2歳年下の米国女性ルース・ケルツと出会い、間もなく結婚。本作はその頃に描かれた一点です。読書中の手を休め、ふと視線を上げた知的な表情が繊細に捉えられ、勢いのある筆致の水彩でみずみずしく彩られています。

宇都宮美術館で8月18日まで開催中の「大川美術館コレクションによる20世紀アートセレクション」でご覧いただけます。

（大谷）

《名画の扉》 大川美術館コレクションから